

第36回理事会開催

研究助成や国際助成など112件の助成を決定

去る10月4日、東京において第36回の理事会が開催された。今回の理事会は助成対象の審議・決定が中心となるが、当財団の設立10周年を迎え、その記念特別助成も含め113件、金額にして3億7520万円の助成が決定された。以下概要を報告する。

◎研究助成は78件、2億1870万円

研究助成は昨年度までの三領域を統合し、「新しい人間社会の探求」を基本テーマとして募集したが、それに伴い助成対象の内容も従来より若干異なることとなった。詳しくは4頁の委員長選後評参照。また特定課題として「新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成」を新たに定めたが、興味ある活動11件が今回の助成対象となった。詳しくは5頁参照。

◎研究コンクールは研究奨励賞10チームに4100万円

“身近な環境をみつめよう”をテーマとする研究コンクールは、今回が3回目となるが、19の候補チームの中から10のグループが研究奨励賞に選ばれた。各チームには、合計4100万円の研究費が助成され、それぞれ今後2ヶ年の研究を開始することになった。詳しくは6頁の委員長選後評参照。

◎国際助成は東南アジアを中心に14件、4083万円

東南アジアの現地の人たちが現地で行うプロジェクトに対して助成する国際助成は、今回の理事会では14件が助成対象となった。各地の固有文化の保存や奨励に関する

目次	
◆Our program/	2
◆設立10周年を記念して特別助成3件	3
◆研究助成の選考を終えて	4
1984年度研究助成対象者	5
◆研究コンクール・研究奨励賞の選考を終えて	6
研究コンクール・奨励賞一覧	7
◆シンポジウム報告	8

る研究に重点がおかれている。

◎「隣人をよく知ろう」プログラムは3件、797万円

今回は、日本人の手になる本を英語版からネパール諸語に翻訳するネパール向けプロジェクト、東南アジア諸国の人々の手になる本をタイ語に翻訳・出版する東南アジア相互間プロジェクト、等が助成決定した。

◎10周年を記念して特別助成3件、4000万円

この10月15日で財団設立10周年を迎えるに当り、次の3件のプロジェクトに対し特別助成を行うことになった。いずれも、これまでの助成を展開するための事業である。

- ・マレーシア図書館パイロットプロジェクト(2000万円)
- ・アジア文献目録作成プロジェクト(1000万円)
- ・宋元版・書誌解題目録編纂プロジェクト(1000万円)

◎その他、フェロウシップ助成など4件、2670万円

勸国際文化会館の行っている「社会科学国際フェロウシップ・プログラム」に対しては10年目の助成2000万円が決定した。これで、10年間の助成合計は2億3500万円となる。この他、フォーラム助成2件 480万円、民間助成活動促進助成1件 190万円が決定した。

設立10周年を記念して

The Big Foundations 完訳成る

財団は今年の10月15日で10周年を迎えることになる。その記念事業のひとつとしてThe Big Foundationsの翻訳出版を行った。フォード、ロックフェラー、カーネギーなどを含む33の大型財団について分析したワルデマー・A. ニールセンの名著で、邦題は「アメリカの大型財団—企業と社会」(林雄二郎訳、河出書房新社刊、6200円)である。豊富な事例に基づく分析は、アメリカの産業社会のドキュメントとしても興味深い。

「これからの民間助成財団」をテーマに国際シンポジウム

同じく記念行事のひとつとして標記のシンポジウムを開催することにした。

日時は10月18日(木)、19日(金)午前10時から午後6時まで。場所は東京新宿の京王プラザホテル。The Big Foundationsの著者ワルデマー・A. ニールセン氏やヨーロッパのハーグ・クラブ会長のW. H. ウェリング氏など内外の20名近い財団関係者や研究者が参加する。(多数の方から出席のお申し込みをいただき、出席受付は締め切りました)



Our program!

トヨタ財団専務理事 林雄二郎

財団の助成活動の中で最もむずかしいことのひとつとして、助成する側と受ける側とが完全に対等であるという認識の確立がある。何でもないことのようにだが、実はこれがなかなか容易でない。

助成活動はいかなる場合でも黒子に徹しなければならぬというのは、いまさらいうまでもないことであるが、黒子になるということは決して相手より下位に立つということではない。うっかりすると、卑屈になってもみ手をするような態度になり勝ちであるが、もとよりこれはとんでもないことである。と同時に、いわゆるコワモチというのは沙汰の限りである。特にこの点は常に自戒しないと、ややもするとそうなりかねない。

観念的にはわかっているつもりでも、現実には、そういう状況は自然とできあがってゆくものでなければ話にならず、強制したり、説得したりしてそうなるような筋合いでないことはいふも愚かなことである。ところで、助成をする側がそのことを明確に自覚することが必要なことはいふまでもないが、同時に助成を受ける側もそういう自覚をもつことが重要である。両方ともそうなつてはじめて正しい関係ができあがる。問題は助成を受ける側、つまり私たち財団の側からすれば相手方ということになるが、その相手方の人たちがどういう認識を持つか、それはむろん、相手方によることだから、当方としてはどうしようもないと思えるが、実はそう思うことは誤りであつて、相手方がそのような自覚をするようになるのもならぬのも、一にかかってこちら側の姿勢にかかっているのである。

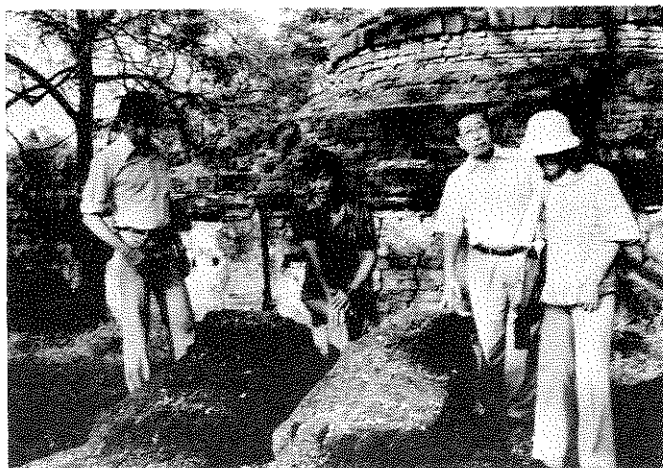
或ることの研究に対して助成をする、ということは、その研究については相手は専門家であり、そのことについて対等などということとはとんでもないことである。しかし、その研究を助成対象として決定したのは財団側の意思決定で、そのような意思決定をしたゆえんのもは、プログラムとしての意義について明確な認識があつたからであり、その判断については絶対に人後に落ちるものではないという自信がなければならず、その点については他の誰よりも自信があるということにまでならなけれ

ばならない。それこそが財団のプログラム・スタッフによるプログラム・ディベロップメントに他ならない。

さて、果してそのようなことを相手方がどう認識し、どう評価してくれるか、それが自然と相手方にもわかつてゆくようにすることもまたプログラム・スタッフの重要な役目だと思っている。むろん、相手方は、財団活動におけるプログラム・スタッフの機能とか、プログラム・ディベロップメントなどということは関係ないことで、そんなことには何の関心もないのが当然であろう。だから、押しつけがましく、そんなことを謀々とすべきことでもなく、第一そんなことを声高にしゃべつてみたところで相手方は何の興味も示さないであろう。さあそうなると、どうしたら、そういうことを相手方に認識してもらえるようになるのだろうか、このところは、プログラム・スタッフひとりひとりの腕の見せどころということになるだろうが、私は最近そのひとつのあかしを自らはつきりと知る機会を得た。これは私にとってひとつの収穫だつたと思っている。

それは、昨秋たまたまタイのバンコクで、トヨタ財団が数年来進めてきた「隣人をよく知ろう」翻訳出版プログラムのタイ側の責任者であるタイでは代表的な知識人と話しているうちに、彼はこの「隣人をよく知ろう」プログラムのことを常に our program と言っていることに気付いた。彼自身特に意識してそう言っているという風ではなく、全く自然に、つまり全く無意識に口をついて出てきた言葉のようだった。しかし私には、この our program という言葉が鮮明に心に焼きついて離れなかつた。少し大げさにいうと“これだ!”と思つたのである。少なくともこの「隣人をよく知ろう」プログラムに関する限り、my program でもなければ your program でもない。our program というこのひと言の中に私は、わが方と相手方とが完全に対等な関係にあることを相手方が確認したことの明らかなあかしをみとつたのである。

遺跡調査の現場を見学 (タイにて。右から2人目筆者)



**設立10周年を記念して特別助成3件**

情報化社会へ向けての根底的な基盤整備のために

財団法人トヨタ財団では、この10月15日に設立10周年を迎えるにあたり、これを記念して3件の特別助成を行うことといたしました。

これらの助成対象は、広い意味での図書館活動の促進に関するものであり、いずれも複数の図書館のネットワークを基盤としたプロジェクトです。情報化やシステム化の進行の中で見失われ勝ちな、しかも図書館の普及や活用といった点で根底となる、地道な基盤整備としての意味をもつものと思います。

助成対象の選定にあたりましては、特に次の点に留意いたしました。

- ① これまでの助成成果を受け、その展開となるもの。
- ② 今後の情報化社会の進展に対して、その基礎的な備えとしての意味のあるもの。
- ③ 陽の当らない分野のプロジェクトで、特別助成をきっかけに当該のあるいは関連の分野へのインパクトが予想されるもの。
- ④ 人材育成という観点から意義の大きいもの。
- ⑤ 長期的な視野のもとに構想されたもの。

1. マレーシア図書館パイロット・プロジェクト

代表者：モハマッド・ノア・アザム
(マレーシア読書促進委員会 委員長)
助成額：2,000万円

一国の社会経済的發展と識字率の間には強い関係があり、また識字率を高めることは、人々の一生の読書習慣と関心を改善することに大きく関係する。しかし字は読めても読書習慣がマレーシアの特に農村部では育っていない。その大きな理由の一つが、読み物を入手することが難しい、ということである。

マレーシア読書促進委員会は1980年に設立され、読書促進キャンペーン、図書館展、大規模調査「マレーシア人の読書習慣と関心に関する研究」、「読書促進と地ノア・アザム氏一財団にて林専務理事と

域図書館の運営に関する研究」(いずれもトヨタ財団国際助成の対象)等を行ってきた。

このプロジェクトは、マレー半島部の11州から、農村部にある図書館を1館ずつ選び、合計11館に図書を供給し、図書館職員を訓練することによって、図書館のサービスを向上させ、農村の人々の読書への関心を促進することを目的としている。

数年にわたって当財団が助成を行ってきた読書促進分野におけるプロジェクトの実践的展開として成果が期待されることは勿論、情報の流れに関する基盤づくりとしても意義が大きい。

2. アジア文献目録作成プロジェクト

代表者：中村弘光 (アジア資料懇話会 代表幹事)
助成額：1,000万円

日本が「脱亜入欧」を目指し近代化と工業化を始めて以来、日本への情報の流入は、欧米からのものが質・量ともに主流となり、現在では世界の他地域から流入する情報の質・量との間に大きなギャップを生じている。この不均衡を回復するための一つの方策として、アジア資料懇話会は、日本人が世界の他地域(日本

はアジアに位置するので、まずはアジアに焦点を絞る)についてどのような認識をし得る状況にあるかを明確にするために、邦文の東南アジア関係文献目録(戦後から現在までに刊行されたもの)の作成を、トヨタ財団の1982、3年度のフォーラム助成を得て実施してきた。

このプロジェクトでは今後の5年間に、上記の文献目録の出版、および明治以降終戦までの東南アジア邦文文献目録の作成、南アジアおよび西アジアについても同様の文献目録の作成を行うものである。同時に、こうした資料を取り扱う地域研究司書の養成、社会的コミュニケーション活動としてのアジア図書館展の開催を行う。実現すれば、この分野における基礎情報のインフラストラクチャーづくり、人材育成および社会的インパクトが期待できて意義が大きい。

3. 宋元版・書誌解題目録編纂プロジェクト

代表者：尾崎 康 (慶応義塾大学付属研究所斯道文庫 助教授)
助成額：1,000万円

漢籍の中でも宋元版は厳密な校訂を期して編纂されたため、テキストとして後代のものよりきわめて優秀であり、学界における要求度も高い。しかし稀覯性の故に研究者の利用は難しい。また、鑑定調査に基づく書誌目録も故阿部隆一教授による台湾所在の全体調査と日本所在の経部についての調査(トヨタ財団研究助成により完成)以外には存在しない。

このプロジェクトは、これらの成果を継承し、今後5ヶ年にわたり、日本所在の宋元版漢籍の史子集部約880部を対象に、書誌学的な鑑定を行い、マイクロフィルムによる複本製作を行い、最終的にはこれらの解題目録を編纂出版することを目的としている。また中国側の諒解が得られれば北京本等との比較研究も行うこととしており、実現すれば日中学术交流としての意義も大きい。また、本プロジェクトを通してこの分野の後継研究者の養成も意図されている。





研究助成の選考を終えて

選考委員長 加藤一郎

〔新しいプログラム〕

今年度からトヨタ財団の研究助成の方法は、大きく変更された。「新しい人間社会の探求」を基本テーマとし、これまでの三つの領域区分を統合したのが、その第一点である。このため、従来は三つの委員会で別個に選考していたものを、今年度は一つの委員会で選考することになり、選考の方法についても幾分異なる手順をとることになった。

変化の第2点は、「新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成」という特定課題が取り上げられたことである。これは、今後の財団活動を展望した上での試行的なプログラムというべく、一般の研究助成とはやや性格を異にする。それゆえ、選考に当っては、直接に委員会で選考する形をとらず、別途にアドバイザー会議を設けてここで第一次の審査を行い、さらに事務局での調査を経た上で、最終的に私どもの委員会で選考する形がとられた。

〔研究種別による採択件数〕

特定課題を除くと今年の申請件数はI、II、III種を合計して700件であった。このうち今回採択されたのは、67件である。採択率は10%弱ということになり、これまでとほぼ同じ厳しさである。次に研究種別ごとに見ることにする。

若手研究者の奨励を目指した第I種研究では、246件の申請に対し、25件が採択となった（採択率約10%）。今年度の特に著しい特徴は女性的大幅な進出である（25名中10名）。また、外国の研究者も、昨年度よりさらに増加した（25名中6名）。選考に当って特に女性や外国人を優先させたわけではないから、この傾向の中にはあるいは将来の日本の研究界の予兆が示されているのかもしれない。

第II種研究は、次年度以降の総合研究に向けての予備研究という性格をもつものであるが、ここでは418件の申請に対し、26件が採択となった。採択率は6.5%と非常に厳しいものとなっている。学際的・職際的・国際的な共同研究を条件としたのであるが、申請の中には、一研究室内の一専門分野の研究と見られるものも少なからずあったし、また、文部省の科学研究費や海外学術調査で申

請・採択が可能と思われるものもかなりあった。このようなものについては、民間財団の助成という性格から、優先度をさげた。また、今回採択となったものの中には若手の研究者が代表となり年長の研究者が共同者として参加するという形の研究体制のものがいくつか散見された。これは、研究の実態を明示するという点で好ましいことであり、今後の共同研究の一つのあり方を暗示しているともいえよう。

総合研究である第III種研究については、36件の申請に対して、16件が採択となった。この種別については、今年度は申請資格を昨年度までの助成対象者に限定したため、他の種別に比べて申請数が少なく、採択率だけから見ると、通りやすかったように見える。しかし、これまでに難関を通過したものの中での選考であったため、内容的には相当厳しいものがあったように思う。予備研究から本研究に進むためには現段階ではやや不十分と思われるものもあり、そういうものは不採択となっているが、さらに準備を重ねた上で来年度に再度申請することを望みたい。

〔研究テーマの特徴〕

これまでの三領域を統合したため、申請の研究テーマについても相当な変化があった。これまでは環境領域を中心に自然科学系の研究が過半数を占めていたが、今年度は従来の教育・文化領域に属するもの、とりわけ文化の領域に属する申請が圧倒的に増加した。これを反映して、採択されたもののテーマも、文化に関するものが多い。特に国際化に関する諸テーマ、すなわち、文化交流や異文化との出会い、国際的な文化比較に関するものが多い。このほか、外国人による日本文化の研究やアジア諸国の伝統的社会の文化人類学的研究なども、かなり採択されている。

福祉や環境に関する研究としては、直接的な救済や公害対策を求めるといったものより、科学技術と人間、あるいは人間と人間、の新しい関係を樹立していこうというものが目立っている。

財団では、三領域を統合することにより、各領域別の問題よりも、むしろ各領域の中間的あるいは相互関連的な問題をとりあげたいという意向であった。また、自然科学・社会科学・人文科学がそれぞれの城を守るのではなく、これらが一体化していくような研究活動を促進しようとしている。今年度の申請では必ずしもこのような意



向は十分反映されてはいないように思われたが、今後そのような方向へ発展していくことを期待したい。

〔選考について〕

トヨタ財団の選考は初めての体験であったし、取り扱うテーマも非常に広範にわたっているの、どうなるかと心配したが、いちおう筋の通った選考をすることができたと思う。これも、厳しい暑さの中で大部の申請書類に目を通し、長時間の審査に熱心にご参加いただいた11名の選考委員の方々のご尽力によるものである。特に、江上信雄氏には、副委員長として私の任務の一部を分担していただいた。申し合せによりそれ以外の委員の氏名は公表しないことにしているが、改めて各委員のご尽力に厚く感謝する次第である。

研究助成・特定課題の選考を終えて

トヨタ財団 事務局

今年度から新たに設定した特定課題「新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成」については44件の応募があった。これらの中には課題の趣旨、即ち「活動の体験を共有の財産とするための記録の作成」に必ずしも適さないものや申請書の記載内容が不備なものもいくつかあった。中には研究活動の取りまとめを目的としたものや自分達の活動のPRのみを意図したものなども散見された。

こうした申請を事前にチェックした後、特定課題アドバイザー会議に諮った。ここでは、主に、現時点で記録することが大いに意義あることであるかどうか、その活動が充実したものであるかどうか、について議論された。

また、同種の活動についての申請の場合は、いずれの内容がより趣旨に近いものであるかも検討された。その結果12件が候補として取り上げられた。活動が未だ発展途上にあるグループや活動内容の点で独創性にやや欠けるグループ及び資金的に比較的恵まれているグループは、はずれることになった。

これらの結果は、第1回の選考委員会に報告した。その後、候補となった12件すべてについてインタビューを行った。ここでは主に、1)グループの信頼性、2)記録作成上の実質的な問題点、3)グループの今後の課題、等々申請書からは読み取りにくい点を把握することを狙とした。そして検討の結果、1件については、現時点で記録することが時期尚早であると判断し、11件を第2回の選考委員会に諮り、審議の結果、これらを最終的な助成候補とすることとなった。

候補の内訳を活動分野別にみると、海外援助1、国際交流1、難民救済2、街づくり1、環境保護1、障害者福祉3、老人ケア1、複合1、計11件、2000万円となっている。

これらはいずれも活動内容が先見的で充実しており、その進め方も極めて独創的であって、記録としてまとめれば同種のグループあるいはこれから同様の活動を企画している人々にとって大いに参考となるものと考えられる。

これらの記録が、今後の市民活動のネットワークづくりに寄与することを期待すると共に、今回惜しくも助成を得られなかったグループの方々については、本課題の趣旨および選考過程で検討された点などをご理解いただき、ご了承願えれば幸いである。

1984年度 研究助成対象者

(数字は助成金額、万円)

〈第I種〉小泉康一：アジア・アフリカ発展途上諸国における大量難民の定住プログラムの立案強化のための研究 195/
清水純：台湾原住民クヴァラン族の伝統文化とその変容175/
出川昌人：日米貿易摩擦における米国側の政治的要因の研究 200/
早瀬晋三：ダバオ・フロンティア史 200/
中川正：ルイジアナ墓地の地域特性に関する文化地理学的研究165/
竹内佐和子：フランスの海外技術援助における人的要素、特に海外教育者養成の意義150/

佐藤智美：日本人と日系米人の教育に対する価値観、態度に関する比較研究150/
シビル・ソートン：西方浄土仏教と悲劇的な英雄の発展の関係125/
ジョン・ブリン：幕末・明治初期の思想闘争史190/
メイナード・K. 泉子：日米談話文法比較115/
高桑史子：スリランカにおけるシンハラ漁民社会の研究 180/

小野木三郎：ふるさと理解のための親子自然学習会とそのカリキュラム作成に関する研究95/
長谷川成海：メキシコ農地法制の理論と実際180/
新倉涼子：働く母親の母性意識と子どもの社会適応125/
谷口明広：重度身体障害者の自立生活と

日本的自立生活援助センターについての研究150/
池田富樹：高活性低毒性高分子殺菌剤の開発180/

清原慶子：マルチメディア化する情報環境におけるメディア教育170/
木内裕子：台湾漢族の漁村社会と女性175/
ウンベルト・T. ヤマキ：ブラジルにおける日系人の住環境に関する研究165/
安藤明人：児童公園における幼児・児童の遊びに関する比較行動学的、環境心理学的研究195/
小林多寿子：大都市における地方出身者の生活と同郷団体の形成150/
ドナルド T. ローデン：大和健児よりにやけた男性へ 200/ (次ページへ続く)



第3回研究コンクール「身近な環境をみつめよう」

研究奨励賞の選考を終えて

選考委員長 浅田 孝

86件の応募の中から選ばれた19チームが、本年4月に研究奨励賞候補として予備研究を開始して以来、早くも半年が経過した。

この間、各チームでは、今後2カ年にわたる研究の実施計画をまとめるために、会合や予備調査などをつみ重ねてきた。一方選考委員会でも、より詳しく研究チーム

の実情を把握するために、各委員で分担してそれぞれの研究現場をたずね、インタビューを行ってきた。

去る8月24、25日の両日には、これまでのつみ重ねの総決算として、研究実施計画報告会を開催し、それに前後して選考委員会がもたれた。報告会後の選考委員会では各チームの研究実施計画に基づく研究奨励賞第一次選考が行われた。また、9月12日には、予備研究報告書をもとに第二次選考が行われ、最終的に10チームを研究奨励賞として理事会に推薦することが決定した。

〈地域分布〉

今回奨励賞となった10件について見ると、地域分布の

板垣明美：西マレーシア北西部稲作農村における稲作技術の変化とそれに伴う環境の変容についての研究130／バクティアル・アラム：沖縄とバリの宗教比較研究160／ピクター・カーペンター：占領政策にともなう地域社会の国際化140／

〈第II種〉ミカエル・ラウク：日独経済関係の歴史的発展に関する共同研究270／植木武：国際結婚児の実態研究200／直良博人：遺伝子の領域効果にもとづく発ガン機構研究の試み235／ヨーゼフ・クライナー：中央ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの調査・研究150／田上隆司：日本語対応「手話辞典」編纂作成のための準備研究200／

飯島宗一：広島・長崎原爆災害のデータベース化と被災モデルに関する予備研究300／川村次郎：脊髄麻痺者に対する機能的電気刺激の実用化研究300／田村正人：人工的な寄主個体群を用いたマツカレハ卵寄生蜂の生態学的研究215／中村隆英：戦後日本の政策構想と経済政策の形成過程200／山下彰一：東南アジア諸国の開発過程と対日観300／

リリー・ゴージャノン：タイにおける日本の経営管理制度の現状とその適用性285／熊谷文枝：過疎と過密に生きる三世代の日本人300／大橋信夫：職場集団における文化摩擦と葛藤300／黒柳米司：ASEAN＝日本間の高等教育交流の実態および今後の課題300／杉山幸八郎：知識工学的手法による先天異常医療コンサルテーションシステム開発290／

黒田安昌：母国語の拘束と国際相互理解215／垣花秀武：相互理解、相互受惠を目的とするマレーシアへの技術移転に関する研究300／藪田碩哉：「浅草娯楽調査」の復元と社会地図作成についての研究195／石川忠臣：町並み保存運動の展開と全国町並み保存連盟の役割275／宮城雅子：インシデント・レポート・システムについての試行的研究170／

横山正：イタリアと日本の建築関係語彙に見る空間感覚の差異の比較研究290／箕浦康子：二重文化的状況下の子どもの社会化過程の実証的研究200／児島三郎：高齢者の physical activity と mental activityの低下予防に関する研究200／清水誠：海洋に投棄されたごみが生物に及ぼす影響に関する予備的研究290／恩地裕：地方医科大学新設に伴う、地域医療へのインパクトの検証290／井上 K. 果子：ブラジル日系人の心理に関する比較文化的研究300／

〈第III種〉益田庄三：日本と韓国における漁村の生活文化の比較研究400／織田正美：老化の心理・生理的要因に関する研究420／市川信愛：華僑教育の沿革と現状に関する国際的比較研究1,100／中川武：アジアにおける建築遺構の修復手法の基礎的研究790／今泉清：東京下町における職人・手仕事の研究200／

奥平龍二：日本・ビルマ交流のための基礎的研究560／吉沢典男：方言のイントネーションに関する実験的研究760／井出祥子：日本人とアメリカ人の敬語行動の

比較研究590／越永重四郎：仏教文化とキリスト教文化を背景とした親子心中の発生要因のメカニズムの分析に関する国際比較研究760／村上處直：災害事例の総合的データ・バンク・システムの作成と運用に関する研究1,220／

黒田長久：ハシボソミズナギドリ(Puffinus tenuirostris)の大量斃死に関する総合的研究540／本平勇吉：森林の伐採許容量と環境保全に関する研究260／橋本悟郎：ブラジルの薬用植物の植物学的研究520／新庄文明：地域における包括的な歯科保健活動の推進に関する研究400／ラヴェーリ・マッシモ：日本の空間概念・原理・構造の研究420／由上修三：ワクチン非接種地区の前橋市におけるインフルエンザの流行調査とインフルエンザワクチン効果に関する研究300／

〈特定課題〉()の活動に関する記録の作成 大橋正明：(シャプラニールー市民による海外協力の会)200／秋尾晃正：(財団法人南北海道国際交流センター)170／谷中輝雄：(社団法人やどかりの里)200／有馬実成：(曹洞宗ボランティア会)185／中村敏：(羽根木ブレーパーク実行委員会)160／帯刀弘之：(社団法人友愛の灯協会)170／

足立原貫：(農業開発技術者協会)200／増子建：(社団法人日本青年奉仕協会)180／安藤忠：(北九州市キャップハンディー実行委員会)160／岩崎駿介：(日本国際ボランティアセンター<JVCC>)185／片岡君子：(奈良たんぼの会)190



点で、東京4件、神奈川、岐阜、愛知、大阪、青森、富山各1件となっている。東京が4割を占めているが、応募件数では東京は全国の約1割であった。東京のほかに神奈川、大阪も含めて、大都市の環境問題に集中した感がある。

〈テーマ分類〉

テーマ分類では、都市鳥、ホテル、アジメドジョウ、上野の森の自然など、生物に関するものが4件と多かった。その他は、東京都下の自給農場、愛知の産業考古学、大阪の住宅密集地、南部の食生活、杉並の学校移転、富山の雪と暮らし、など、内容はかなりバラエティに富んでいる。ただ、「周防大島の老人の生きがい」が入賞できなかったことで、精神的環境にとりくむ研究がなくなったことが惜まれる。

〈研究の楽しみ〉

研究チームの構成だが、代表者が大学の教官というものもあったが、それも含めてほとんどの人がアカデミズムとは離れた立場・視点で参加しているといってもよいだろう。研究を職業とする者が、自身の業績のために研究をするというのではなく、普通の人たちが、いわば余暇を有意義に過ごすぐらいの遊びの精神を持って研究にとり組んでいるようにも見受けられる。身近な環境をみつめ、その中から人間存在の根底にかかわる神秘を読みとり、ナゾ解きに挑む。考えようによってはこのような研究こそこれからの最も人間的な娯楽になるとはいえないだろうか。

〈助成金額〉

当初、応募要項には金賞(助成金500万円)、銀賞(助成

金200万円)の2通りの奨励賞をうたっていた。しかし、選考委員会の論議では、これまでの2回のコンクールの経過からみて、この段階で奨励賞を2通りに分けることは適当ではないとの意見が強かった。審議の結果、研究奨励賞は金賞・銀賞の区別をつけないことに決定し、各チーム一律に、400万円の助成を行うこととした。また東京での報告会に参加する上で旅費負担の大きくなるチームには別途その旅費を追加することにした。これによって特別賞に向けての展開の過程で助成金額の上でのハンディはなくなったといえる。

〈再度挑戦の機会を〉

今回選外となったチームもそれぞれに努力のあとが感じられ、またようやく軌道にのりはじめたチームなど、惜まれるものがいくつもあった。選考委員会では、これら候補に終わったチームには、次回コンクールに際して、再度奨励賞に挑戦できる権利を与えてはどうかという意見があり、事務局に検討してもらうことになった。各チームとも、今回不十分だった部分に改良を加えて、ぜひ次の機会に再度チャレンジしていただきたいものである。

* * *

今年の夏はとくに暑かったが、6月から8月にかけての最も暑い盛りに、北海道から沖縄まで全国各地のチームのインタビューに出かけていただいた選考委員の皆様にもあらためてお礼を申し上げたい。

奨励賞を受賞した各チームのこれからの努力と、選考委員各先生の尽力とが一体となってよりよいコンクールへと発展していくことを切望するものである。

研究奨励賞一覧

応募団体名 責任者氏名(団体人数)	研究題目	対象都道府県 助成金額(万円)
都市鳥研究会 唐沢孝一(他29名)	東京駅・皇居周辺における都市環境下に生息する野生鳥類の生態研究	東京 400
水系環境を考える会 大場信義(他9名)	三浦半島におけるホテル生息地の保全および再生に関する総合的研究—副題略—	神奈川 400
やば耕作団 明峯哲夫(他28名)	市街地周辺農地を利用した都市住民による自給農場運営の可能性に関する調査・研究—副題略—	東京 400
アジメドジョウ岐阜県調査会 和田吉弘(他55名)	岐阜県内諸河川におけるアジメドジョウの生態と保護対策	岐阜 415
愛知の産業遺跡・遺物調査保存研究会 石田正治(他21名)	愛知における産業遺跡・遺物の調査と保存、その教材化に関する研究	愛知 415
リフォーム浜校区研究会 玄幡真美(他15名)	門真市浜校区における空家の変遷過程とミニ再開発への移行メカニズムに関する研究	大阪 420
南部の味と暮らしの環境を考える会 神山恵介(他13名)	南部料理暦づくり—風土性を生かした食生活の創造	青森 430
上野の緑地環境研究会 小川 潔(他25名)	上野公園とその周辺の緑地環境の保全と育成ならびに教化についての研究	東京 400
杉小・学校環境研究会 村上美奈子(他22名)	杉並区立杉並第十小学校移転にともなう教育環境の変化と子どもへの教育効果との関係調査	東京 400
とやまの雪研究会 藤井昭二(他32名)	雪と人間生活とのかかわりに関する研究—北陸湿雪地域、とくに富山県地方を中心として—	富山 420
計	10 件	4,100



シンポジウム報告

「小型和船文化」と
「ワラ文化」をめぐって

〈佐渡→小淵沢→民博〉連続シンポ開催

8月から9月にかけて「現存する小型和船の全国調査」(昭和53年度、代表：真島俊一)と「日本における『ワラの文化』に関する総合的実証的調査研究」(昭和55、56、57年度、代表：坂本勝比古)という2件の助成研究の報告を中心としたシンポジウムが連続して開催された。

新潟県佐渡郡小木町と山梨県北巨摩郡小淵沢町の2カ所では、「ものを通して見た生活文化の変遷」というテーマのもとに、小型和船やワラと、地域の生活とのかかわりをめぐって講演、研究報告、討論が行われた。また大阪の国立民族学博物館では「日本在来技術文化の再評価」というテーマのもとに、「和船」、「ワラ」各1日ずつ、様々の専門分野の参加者による学際的な研究報告と討論が行われた。

▼渚編—佐渡小木町の集い

小木町でのシンポは、町と、「和船」と「ワラ」の研究者による「近代化と暮らし研究会」との共催で、県外からの参加者も含め百数十名の参加を得た。

8月17日は、このシンポに合わせて新館をオープンした小木町立博物館で、地元の高校教師など郷土研究者により、佐渡の概観について展示物なども使ったオリエンテーションがあった。翌18日は小木港の海運資料館に会場を移し、川添登、網野善彦、柚木学、石井謙治はじめ各講

小淵沢町の集い—ワラ馬づくりのひとこま—

師の方々の講演・発表と真島俊一、坂本勝比古、宮崎清各氏の研究報告が行われた。19日午前には宿根木の公民館で地域博物館の今後のあり方をめぐってパネルディスカッションが行われた。

連日の日程はきわめて過密であったが、郷土芸能や、「鼓童」による鬼太鼓の妙技などの演出も会の雰囲気在大いに盛り上げた。また、参加者はそれぞれ民宿に分宿し、各宿で夜遅くまで熱心な討論が繰り広げられるなど、交流の場としても意義のあるシンポジウムだった。

▼山里編—小淵沢町の集い

ここでも町と「近代化と暮らし研究会」との共催で、二百名近い参加者による充実した会となった。8月29日には主に県外からの参加者を中心にバスによる町内の散策と宿所の「いこいの村」での歓迎式が行われた。翌30日は小学校の体育館を会場に山梨県知事も出席して終日シンポジウムが行われた。川添登、星寛治、秋岡芳夫の各先生の講演や、坂本、宮崎、真島各氏の研究報告と、ひきつづき中村たかを先生の司会によるパネルディスカッションが行われた。特にワラをめぐる話題には地元の農業関係者など多くの方々の参加を得た。31日は、地元の資料館に保存されているワラ加工の道具を体育館に持ち出し、地元老人会の方たちによるワラによるものづくりの実演と解説があり、次いで地元小・中学生も参加して全員でワラ馬を製作した。

小木町の場合もそうであったが、小淵沢町でもこのシンポのために1年も前からワラを確保しておくなど、主催者である町の熱意が会の成功をもたらしたといえる。財団はこれらシンポジウムに対しては成果発表助成によりその費用の一部を援助した。

▼民博—学際的討論

ここでは9月7日、8日の2日にわたりそれぞれ「和船」と「ワラ」をめぐって、これらを日本の在来技術文化の中でどう位置づけていくかについて技術・経済・民族・建築・デザインなど様々な観点からの報告・討論が行われた。報告者・討論者は佐々木高明、中村たかを、石井謙治、真島俊一、秋道智彌、大塚和義、石川忠臣、田中文男、菅政之、柚木学、田村善次郎、川添登、坂本勝比古、宮崎清、秋岡芳夫、池浩三、神原在雨、青木弘行、三浦公亮、宇賀洋子、の方々である。

主催は国立民族学博物館と千里文化財団とトヨタ財団の三者で、会の形式は非公開であったが、トヨタ財団にとっては、このシンポジウムは第18回の研究報告会も兼ねるものであった。(久須美記)

編集後記

*財団の研究助成による記録映画「越後奥三面一山に生かされた日々」が完成しました。ダムに水没するという集落での山人の生活を描いた、民族文化映像研究所の作品で早くも反響を呼んでいます。

*同じ民映研によるトヨタ財団第2回研究コンクールの記録映画も完成しました。10月の10周年記念シンポで上映されます。このシンポではまた、タイにおけるトヨタ財団の活動をタイの映画製作者が記録したビデオも上映されます。

*10周年の記念シンポジウムを控え、事務局は連日多忙な日を送っています。すでに200人を越える出席希望をいただいております。10年を迎えたから特に切っております。10年を迎えたから特にどうというわけでもないのですが、気分一新で未来をみつめていきたいと思っています。これからもどうぞよろしく。

トヨタ財団レポート No.29

このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申しこみ下さい。

発行日 1984年10月17日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 山口日出夫
編集人 久須美雅昭
印刷 真友工芸株式会社